

【書評】

篠原資明
『あいだ哲学者は語る』

晃洋書房、2018年

濱田明日郎

この著作について

『あいだ哲学者は語る』は、著者が30年来展開してきた「あいだ哲学」の対話篇である。『あいだ哲学者は語る』——どこで？ 対話篇なのだから、もちろん〈あいだ〉で。「はじめに」にはすでに重要な前提が書き込まれている。ライブニッツの名を一度だけ出しつつ指摘するように、「〈あいだ〉の交通を保証するのに、神など必要とされない」（8）¹。このことを方法としての対話篇にも敷衍するなら、〈あいだ〉でなされる以上、この対話 *entretien* は予定調和 *harmonie préétablie* 的なものではありえない——すなわち二人の交通 *communication* は、諸実体が神に定位されていらい結果的にあるだろうといった類のものではない²。むしろここでは、本質だけを問うてくるという意味で最も厳しく最も「理想的」な相手との対話が目指されている。生徒は先生自身に生成を促すのだ。「先生、先生って何ですか？」あるいは「先生、生成って何ですか？」（165）。この対話相手のおかげで、われわれもまた理想的な生徒として、理想的なポジションで、哲学者の語りを聞くことができる。

この書評について

わずかな紙幅を「あいだ哲学」の教科書的な整理に費やすことはしない。じっさい、われわれが手にしている道具はかなり軽量化されたものである³。〈あいだ〉において考えられる四つの交通様態——一方通行の「単交通」、双方向の「双交通」、交通を遮断する「反交通」、「異質性を保持しつつ生成させる」とされる「異交通」（7）。整理はこれで十分だ。本書の魅力はそれら交通様態の柔軟な応用にある。目次を見れば明らかだろう。「建築」「衣服」「顔」「言葉」「政治」「歴史」「芸術」

¹ 以下、とくに断りなく(8)のように示すのは、『あいだ哲学者は語る』の引用ページ数である。

² G.W.ライブニッツ(2019、§14)を参照のこと。「[.....]すべての実体のあいだには完全な一致があることになり、この一致のために、[.....]仮に実体が相互に交渉し[引用者註：交通し *communiquer*]あっているような場合に認められるだろうものと同じ結果になる」。

³ 実際、著者の『言の葉の交通論』では、「差し迫った問題」を考えていこうとするとき、「自分で造語でもいいから概念化して、いわば最小限の手持ちの装備で始めようとした」（201）ものが交通論であるとされている。

「主体」「生と死」そして「食」。おおよそ人間にとって根本的なトピックが縦横無尽に語られている。これらの豊富な広がりすべてを展開することは評者の手に余る。したがってここでは、ひとりの読者＝生徒として、この著作との〈あいだ〉で限定的な問いを立てることにしたい。特に「悪」に関して考えようと思う。

悪の実在と政治

交通論にまつわる諸著作と比較しても、この対話篇でとりわけ強調されるのは悪の実在とそれに抗する戦いの重要性である。見紛いようがないだろう、第一章において反交通装置としての建築にはすでにテロリストの排除が含意されているし（11）、第三章にはテロリストののこやかな顔が登場する（40）。その顔の裏には「隠された悪意を前提としなければならないこと」もままある（106）のだ。要するに悪の存在は「具体的な現実」（64）である。具体的な現実としての悪に抗するためには現実的な対処が必要であり、実効的な権限を持った国際機関が存在しない（69）以上、この戦いを実効的に行えるのは今のところ国家しかないとき、それゆえ国外からの悪に対しては軍の整備が不可欠である（63-64）とされる。「政治は、まずもって悪に対する戦い」であり、「悪に対する反交通装置」（62）である。

悪とは何か。ひとまずは「生存を危険にさらすこと」（71）である。ここには必ずしも悪意が前提とされていない。悪意のない悪が存在するからだ（自然災害など）。だから悪はより正確には「生成の唐突な中断」（72）である。「唐突な」ということがポイントである。「唐突な」中断がなぜ悪なのかといえば、唐突な死は自らの生存を振りかえる余裕も与えないからである。ゆるやかに死にゆくひとは、生成のもとで死を理解し、これまでの生を思い出すこともできるだろう。そうした理解・納得や自らの過去の想起も許さない「中断」こそ、まさに生成に対立するところの「悪」である。同書は悪の発生論や生成論を語らない。そこに敢えて理由を見出すならば、今述べたように、そもそも悪が本質的に生成に対立する「唐突な」ものと規定されているからではないか。

「反交通」の賭金

すでに明らかなように、悪に抗する戦いにおいて支配的な交通様態は反交通であろう（悪に対する反交通装置としての政治）。改めて注意したいが、「反交通」といっても、独立した主体が交通に先立ち、その主体が交通を拒む、という話にはなっていない。主体は「あいだの一方の側として、しっかりと想定されるもの」（59）ではある。そして主体が反交通をなすことももちろんある——例えば自分を守るための行動、というときに（「人を殺してもいい場合がある」（118））。しかし根源的なレベルでは、むしろ反交通が主体をなす。どういうことか。われわれはかつて赤子であり、生後数カ月間は自分の体が一個のまとまった体として存在しているという意識さえ持

っていなかった(23)。反交通装置としての衣服にくるまれて守られることで、われわれははじめて「一個のまとまった体」という意識を得る(23)。ここには「自分を自分と考える」際に重要な事態がある(22)。こうした「衣服内存在」としての反交通のありかたから、主体的な交通は可能になるだろう。「何事かに働きかけ、それを換えようとするとき、変える側は、変えられる側に巻き込まれまいとする。単交通的な働きかけは、働きかける側と働きかけられる側との反交通を必要とする」(54)——いわば反交通あつての単交通。また反交通的建築の中でこそ「軟体構築」的異交通も可能となろう(「貝類のような軟体動物は、反交通装置としての貝殻に守られながらも、外部から吸収したものを分泌し直して、貝殻の裏側をきれいな壁面にしてしまう」(16))。政治の話題と併せて考えるなら、反交通によってはじめてなされた主体が、反交通装置としての政治によって維持されるというわけだ。

根源悪

さらに悪の話題を深めよう。著者は言う。「生成の唐突な中断以上に悪いこと」、すなわち「根源悪」が存在する(72)。それは、この生成の唐突な中断を被った者たちを忘却することである。想起の機会さえも奪われた者たちのことを(あるいは忘却の機会さえ奪われた者たちのことを)、忘却することである。では忘却とはどのような事態か。「〈かつて〉を前提としながら〈かつて〉をきちんと考えない」ことだろう(128)。前提としながら、というところがポイントである。ベルクソンの記述を引き受けつつ著者はこう語る。独立変数としての時間は〈かつて〉を前提としながら〈かつて〉をきちんと考えないモデルである。近代科学は「かつて〈いま〉だった」という意味での現在、すなわち t_1, t_2, t_3, \dots という現在の連なりだけで時間を扱う(未来もそのように語れるが、ここでは措く)。これは〈いま〉と〈かつて〉のあいだに、「暗黙のうちに反交通を想定してしまつて」(126)おり、〈かつて〉から切り離された〈いま〉だけを考えるからだ。しかし、実際には〈かつて〉を〈いま〉だけで語り尽くすことはできない。なぜなら「かつて〈いま〉だった」の〈いま〉は既に〈かつて〉を前提とするからだ。あるいはこうも言える——現在の連なりしか扱わない近代科学が成功するのは、物質という対象がある意味では現在しか持っていないからだ(MM154)⁴、と。ベルクソンは確かにラヴェッソンを引きながらこう言っていた、記憶力が物質のうちに宿る仕方は理解不能だが、「物質性がわれわれのうちに忘却を置く」というのならよくわかる、と(MM198)。

忘却が悪ならば、悪に抗する態度とはどのようなものか。「いまかつて間の同時性」(129)に依る態度である。〈かつて〉があつて〈いま〉があるというのでもない。〈かつて〉も〈いま〉もその都度の変化を容れるからだ。生成に対して、〈かつて〉と〈いま〉とのどちらが先なのかという実態に合わない議論を排してその真理を捉え

⁴ 以下、ベルクソンの著作は略号を用いて示す。文末の参考文献を参照のこと。

るには、〈かつて〉と〈いま〉との同時性そしてその異交通——あるいは異交通あつての〈いまかつて間〉(128)——こそが究極の事態を指しているのだからなければならない。すなわち、真理 $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ とは反-忘却 $\alpha\text{-}\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ であり (131)、〈いまかつて間〉ある (132)。

異交通のうちにある反交通？ 過去の保存の問題

それでもなお、敢えてこう問うてみたい——〈いまかつて間〉のその「間」が「間」として保持されるためには、その異交通のうちに、なおも反交通が要請されはしないか、と。「異質性を保持しつつさらなる異質性を生成させる」ものとして異交通を考え、その「保持」を言うとき、そこには反交通が、〈いま〉にならずに留めおかれた〈かつて〉がすでに考えられているのではないか、と。

どういうことか。先ほど独立変数としての時間について述べられたときのような〈かつて〉と切り離されて反交通にある〈いま〉の話ではない。すべてが〈いま〉にならないために、〈かつて〉として保持される〈かつて〉を問題としたいのだ。ここではベルクソン読解に寄り道しよう。著者の『ベルクソン』にあるように、「過去と現在の同時性」というテーゼがベルクソンにおいて語られるのは、「現在の記憶と誤った再認」という 1908 年初出のデジャ・ヴュ論である。デジャ・ヴュの現象にとらわれたひとが生き・証言するのは〈いま〉と〈かつて〉の同時性そのものである。

「私は自分が知らないとわかっているものを知っていると感じているという奇妙な立場に置かれる」(ES138)。このような現象に際して、主体は同一質料によってなされる知覚(現在)と記憶(過去)とを同時に生きていると考えられ、従って知覚(現在)と記憶(過去)とは同時になされるのだと考えられる(知覚が記憶になるのではない)。「私たちの生はあらわれると同時に分裂する。というより、分裂することにおいて現れる」(ES136)。〈いま〉と〈かつて〉にあいだが齎されることではじめて、「心的生」が始まるのだ。ただし、デジャ・ヴュの現象はわれわれの「心的生」の中では異常なもので、その原因は、生への注意の不足・意識の躍動の停止だとされている。正常な場合には、関係のない記憶(過去)を知覚(現在)へと通すまいとする反交通が働くのだ。すなわち、「私たちの持つ記憶の総体はつねに無意識の底から押し寄せようとしているが、生に対する注意深い意識が正当にも、現在の行動に貢献できる記憶だけしか通さ *laisser passer* ない」(ES145-146)。ベルクソンにおいて、デジャ・ヴュや走馬灯(ES76)といった現象は、意識の弛緩に伴う記憶の現象と理解されていたのだ。

こうした見通しの下では、〈いま〉とは質料的に別の〈かつて〉として〈かつて〉が想起されるためには、過剰な〈かつて〉を押しとどめる〈いま〉の側の反交通が必要だと思われる。〈いま〉と〈かつて〉の異交通が「異質性を保持」するためには、すべての〈かつて〉が〈いま〉を圧倒してしまわないための反交通が求められる——少なくとも、われわれの「心的生」の水準においては。実際、〈かつて〉と〈いま〉

が分裂し、その「間」が保持されることがなければ、われわれは物質そのもののように〈いま〉のみのうちにあり、あるいは——デジャ・ヴュに襲われたひとが自らをそう感じるように——〈いま〉と〈かつて〉を同時に生きる「自動人形 automate」(ES139)のようなものとなるだろう。

整理する。ベルクソンのには、〈いまかつて間〉を保証するのはまず〈いま〉と〈かつて〉の同時性・分裂であるが、少なくとも「心的生」のレベルにおいて、〈いま〉と〈かつて〉のあいだを保持するときには、そのあいだに反交通も要請されるように思われる。「新しみつつ振り返る」といった想起のさまざまな諸様態(78-82)、そして〈いま〉と〈かつて〉の異交通が生じつづけるためには、反交通が前提とされるのではないか。するとこうなる。〈かつて〉を忘却するものとしての反交通、そのさらに前提には、そもそも忘却および想起を「心的生」に成り立たせる条件であるところの、〈いま〉と〈かつて〉のあいだを保持するための反交通が控えている。

言葉を弄しているのではない。例えばスピノザ的な必然の宇宙なら、〈かつて〉と〈いま〉とは原因から結果へとどこまでも連なっていく。単交通だ。振り返る必要も悔やむ必要もない。ここには根源悪といったものが語られるすき間がない。われわれにとっては〈いま〉に回収されない〈かつて〉があるからこんな話になっている。われわれの持続的な「心的生」は前提として〈かつて〉を遠ざけつつも、しかし〈かつて〉を振り返ったり悔やんだりすることができてしまう。だとすれば、根源悪としての忘却も、われわれの本性でありつづけるのだろうか。こうして、悪をめぐる問題は、記憶の問題あるいは過去の保存の問題へと連なっている(『物質と記憶』の問題系)。

あいだにいること

ついつい大きい問題へと膨らませてしまっただろうか(先生の話を持ち帰った生徒にありがちなことだ)。ひとまずは、『道徳と宗教の二つの源泉』(以下「二源泉」)でベルクソンが扱った悪の問題へと最後の寄り道をして、見通しだけを示しておきたい。ベルクソンが書き留めた悪の姿はそもそも二義性を抱えていた。テキストに従う限り、またしても「弁神論」のライブニッツとの対比でそれは語られる。「愛児が息を引き取る際を看取ったばかりの母親」(MR277)を前に、ア・プリオリに「それでも他の世界に比べてこの世界が最善なはずだ」と言うことなどできない。また、この悪だけを切りとった別の世界などというのは実際のところ内実を欠いた概念に過ぎない。現実的な全体、「生あるものの全領域を覆う数知れぬ苦しみ」(MR276)はまったくの「現実」である。そうした現実的な過去のすべての多をそれとして引きずりながら、しかし、創造し愛する一なるエネルギー＝神が存在する。これもまた善悪を超えた現実なのだ——これが「二源泉」のごく数頁(MR274-279)で暗示される場所の悪の位置である。『ベルクソンとの対話』でのシュヴァリエを信頼するなら、ベル

クソンの悪とは「上昇-下降という二重の運動性を持ったあの進化（創造的進化）の必然的な帰結」⁵としての、いわばやりきれない実在なのだった。

『あいだ哲学者は語る』に戻ろう。ある意味では相反する宇宙の二義性、やりきれなさのあいだに在るということ、そのことを真理として忘れないこと、それこそがあいだ哲学者の立場となるのだろうか。哲学者は善悪を超えた現実としての創造を体現する神秘家ではありえない——あくまでその限りでこう言ってみてもよいかもしれない。哲学者とはあいだに在る者なのであり、その限りで忘れない者である。そして忘れない者は、根源悪に抗する戦いを実践する、と。

結局のところ、評者の上の記述は、絶えざる異交通の生じる〈いまかつて間〉に敢えて反交通を見出すことによって、この豊饒な概念のもつ一面を素描したのに過ぎないのだろう。

〈文献一覧〉

本稿で用いたベルクソンの著作の略号は「→MM」のように示す。

Bergson, Henri.

Matière et mémoire, Paris: PUF. 1896 [2012].→MM.

L'énergie spirituelle, Paris: PUF. 1919 [2017].→ES.

Les deux sources de la morale et de la religion, Paris: PUF. 1932 [2013].→MR.

ベルクソン、アンリ

『道徳と宗教の二つの源泉』森口美都男訳、中央公論新社（中公クラシックス）、2003年。

『精神のエネルギー』原章二訳、平凡社（平凡社ライブラリー）、2012年。

『物質と記憶』杉山直樹訳、講談社（講談社学術文庫）、2019年。

シュヴァリエ、ジャック『ベルクソンとの対話』仲沢紀雄訳、みすず書房、2008年。

ライプニッツ、G.W.「弁神論」『ライプニッツ著作集 第6-7巻』佐々木能章訳、工作舎、1991年。

ライプニッツ、G.W.「実体の本性と実体間の交渉ならびに魂と身体のあいだにある結合についての新説」『モナドロジー他二篇』谷川多佳子・岡部英男訳、岩波書店（岩波文庫）、2019年、95-114頁。

篠原資明『言の葉の交通論』、五柳書院、1995年。

篠原資明『ベルクソン』、岩波書店（岩波新書）、2006年。

⁵ J.シュヴァリエ(2008)、20頁。